

教育方法としての「部活ノート」と「言語活動の充実」に関する予備的考察 －『野球ノートに書いた甲子園』を手がかりに－

栗山 靖弘*

Notes on Extracurricular Sports Activities and Enhancement of “Linguistic Activity” as Educational Method An Interpretation of “Koshien in the baseball notes”

Yasuhiro KURIYAMA

【Abstract】

This paper examines the potential of “notes on extracurricular sports activities” as an educational method for a high school baseball team’s “enhancement of linguistic activity.” In particular, we analyze a series of books called “Koshien in the baseball notes,” which consists of student diaries as well as interviews with managers and students based on notes written by students. By analyzing these books, we clarify that baseball managers want students to write notes.

We found that managers expect students to write not only facts in these notes, but also “analytical descriptions” of subjects such as the results of games, students’ own performance, the contents of their training, and their physical and mental condition. Many managers have the same ideas regarding these notes.

Moreover, managers know that it can be difficult for students to write analytically because of the “relationship of discipline” that must be upheld between managers and students. Managers and students both recognize that meaningful notes are full of “analytical description”; this particularity implies that baseball notes containing analytical description enable the “enhancement of linguistic activities” alongside extracurricular sports activities.

We discuss the educational potential for students at university. “Analytical description” is required in university education; therefore, “notes on extracurricular sports activities” will contribute to students’ articulation from high school to university through the use of “writing activities.”

Keywords: notes on extracurricular activities · notes on baseball, enhancement of language activity, educational method, analytical description.

【要旨】

本稿では、高校生が日々の実践を記録した「部活ノート」を教育方法の一つと捉え、高校運動部活動における「言語活動の充実」の可能性を『野球ノートに書いた甲子園』という書籍の内容の検討を通じて検討し、そこから運動部活動における「言語活動の充実」の可能性を探求する。高校生が日々の部活動の記録をノートに綴ることで、指導者は何を期待しているのだろうか。本稿は『野球ノート』に寄せる指導者たちの期待を明らかにすることで、「言語活動の充実」を図るための可能性を探求する試みである。

検討の結果、以下の点が明らかになった。第1に、「野球ノート」には、指導者の言葉を単に書き留めるだけでなく、試合の勝因・敗因や、プレーの良し悪し、改善方法への「分析的な記述」が求められている。第2に、高校野球における指導者と生徒の間には「規律的な関係」と呼ぶうる関係があり、指導者た

* 鹿屋体育大学アドミッションセンター特任研究員

ちはその関係を回避せず、ノートに自分の考え＝「分析的な記述」を書くことを期待していることが確認された。これらの条件を満たしたノートが、指導者によって「意義のある野球ノート」だと捉えられていることが明らかになった。

最後に、野球ノートにおいて「分析的な記述」を身につけることは、高校の運動部活動にとどまらず、大学教育の現場からの要請でもあるという視点から、以下の点を指摘した。すなわち、与えられた課題について教員がひとまず納得するよう、「無難に書く」ということではなく、「分析的な記述」ができることが、大学進学後の教育にも活かされる可能性があることが示唆された。

キーワード：部活ノート・野球ノート、言語活動の充実、教育方法、分析的な記述

1. 課題の設定

1-1. 本稿の目的

本稿では、高校運動部活動において「言語活動の充実」を図るための実証的な研究に向けた予備的考察を行う。その際、高校生が日々の実践を記録する「部活ノート」を教育方法の一つと捉え、「言語活動の充実」に資する実践であることを明らかにするための足場を作りたい。「部活ノート」を「言語活動の充実」を図るための教育方法として扱うにあたって、本稿では特に指導者の考える「野球ノート」の意義に注目する。

そのための資料として『野球ノートに書いた甲子園』という書籍に注目し、運動部活動を通じた「言語活動の充実」の可能性を探求する。日々の部活動の記録をノートに綴ることを通じて、指導者は生徒に何を期待しているのだろうか。本稿は『野球ノートに書いた甲子園』を読み解くことで指導者の期待を明らかにし、「言語活動の充実」を図るための可能性を探求する試みである。

1-2. 学校教育における「言語活動の充実」

「言語活動の充実」は、2008年の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の「7. 教育内容に関する主な改善事項」に「各教科等を貫く重要な改善の視点」として盛り込まれた（中央教育審議会，2008）。現在、高等学校教育、大学教育、そして大学入学者選抜を三位一体で改革する「高大接続改革」が進められており、そこでも「言語活動の充実」が重要な役割を担っ

ている。また、「言語活動の充実」は2017年3月に公示された学習指導要領にも盛り込まれており（文部科学省，2017）、まさに教育政策上のホットトピックである。

実際の「言語活動の充実」について一例をあげれば、教育学者の阿部昇が国語について次のように述べる。

「〔・・〕なぜそのレトリックを面白いと感じたのかなどを言葉を使って説明・表現する学習活動。またその妥当性を子ども相互で考察し判断し対話する過程。論説文について、自分は納得できたかできなかったかを、子ども相互に話し合うこと。」（阿部2016）

この例から分かるように、言語活動とは自身の内面に生じた思考を「言葉を使って説明・表現する」活動を意味している。

本稿が探求しようとするのは、こうした「言葉を使って説明・表現する」活動を運動部活動の取り組みのなかに位置付けていくための教育方法としての可能性である。

1-3. 運動部活動と「言語活動の充実」

「各教科を貫く重要な改善の視点」として導入された「言語活動の充実」は、教育課程外の教育活動である運動部活動でも奨励されている。2013年5月に公表された「運動部活動での指導のガイドライン」（以下、「ガイドライン」）では、「生徒が主体的に自立して取り組む力の育成」として、「言語活動」が次のように位置づけられている。

「個々の生徒が、技能や記録等に関する自分

の目標や課題，運動部活動内での自分の役割や仲間との関係づくり等について自ら設定，理解して，その達成，解決に向けて必要な内容や方法を考えたり調べたりして，実践につなげる，また，生徒同士で，部活動の方向性や各自の取組姿勢，試合での作戦や練習にかかる事柄等について，筋立てて話し合う活動などにより目標達成や課題解決に向けて必要な取組を考え，実践につなげるというような生徒が主体的に自立して取り組む力を，指導者は，指導を通して発達の段階に応じて育成することが重要です。

教育課程の各教科等での思考力・判断力・表現力等の育成とそのため言語活動の取組と合わせて，運動部活動でも生徒が主体的に自立して取り組む力の育成のための言語活動に取り組むことが考えられます。」(文部科学省，2013)

この「ガイドライン」からは次の2つの論点を読み取ることができる。第1に教科教育で重視される言語活動を，運動部活動でも「生徒が主体的に自立して取り組む力の育成のため」に取り入れることである。特に，「技能や記録等に関する自分の目標や課題，運動部活動内での自分の役割や仲間との関係づくり等」を，「自ら設定，理解して，その達成，解決に向けて必要な内容や方法を考えたり調べたりして，実践につなげる」ことに主眼が置かれている。第2に「指導者は，指導を通して発達の段階に応じて育成すること」が求められている点である。つまり，「生徒が主体的に自立して取り組む力の育成」には指導者による指導が前提となっており，その指導の結果として，部活動における「言語活動の充実」が図られるという論理で構成されている。

したがって，「生徒が主体的に自立して取り組む力の育成」には指導者による指導が不可欠であり，指導者がどのような考えのもとに部活動に言語活動を取り入れているのかを明らかにする必要がある。換言すれば，指導者たちが言語活動を通じて，生徒に何を期待しているのかを示すことで，部活動における言語活動の特徴を示すことが

できると考える。

ところで，「生徒が主体的に自立して取り組む力の育成のための言語活動」が具体的にどのような指導や活動を指すのかは明示的ではない。運動部活動は学校によって，また競技種目によっても様々な活動から構成されており，運動部活動における「言語活動の充実」は多様なアプローチが可能なテーマである。本稿はその端緒として部活ノートによる言語活動をとりあげる。阿部昇によれば，言語活動によって「説明する」，「伝える」，「書く」ことで，思考の再構築が促される」(阿部，2016)。そのため，「部活ノート」は「書く」ことによる説明や意思伝達のツールとして，運動部活動に言語活動を取り入れる際に有効であると考えられる。したがって，「野球ノート」は，「ガイドライン」の「技能や記録等に関する自分の目標や課題，運動部活動内での自分の役割や仲間との関係づくり等」を明確にするうえでも，また言語活動の「事実等を正確に理解し，他者に分かりやすく伝えること」や「事実等を解釈するとともに，自分の考えをもつこと，さらにそれを伝え合うこと」(文部科学省，2014)とも整合的な活動である。

1-4. 先行研究の検討

本稿に近い立場から，「部活ノート」と「言語活動の充実」の関係に言及したものとして栗山(2018)がある。栗山はアスリートのキャリア形成の側面から，スポーツ推薦入試において小論文試験が課されている事実に着目する。そして，「日誌を付けるという行為の集積が入試で評価され，その資質・能力が入学後の教育に活かされることで，アスリートとしてのみならず，大学生としてのキャリア形成にも資する経験になるのではないだろうか」と述べる(栗山，2018)。そのため，部活日誌が大学入学後の教育に資する可能性を示唆している点で本稿に近い立場にある。しかし，栗山(2018)はスポーツ推薦入試を利用する受験者層に対する提案である。本稿はそうした特定の

層だけではなく、高校で運動部活動に取り組む多くの高校生の「言語活動の充実」の検討が中心的な課題であり、栗山（2018）とは目的が異なる。

高校生だけに注目しても、現在、約140万人の生徒（注1）が運動部活動に所属している。そのため、教育方法としての「部活ノート」の可能性の探求は多くの高校生の「言語活動の充実」を図る契機を含んでいるといえるだろう。

また、本稿はこれまで高校運動部活動の意義や効果の測定として行われてきた研究を補完する位置付けにある。例えば、上野（2014）は、運動部活動が「ライフスキル（対人スキル・個人的スキル）を経て、間接的に進路成熟に影響を及ぼす」ことを明らかにしている。渋谷ほか（2018）によれば、「運動部活動の意義」は「個々の部員が運動部活動で使用する忍耐力、集中力、思考力等の個人的なスキル、そして、協調性、コミュニケーション、挨拶礼儀等の社会的なスキルが、学校生活や家庭生活等でも適用される」ことである（渋谷ほか、2018）。このように、運動部活動の意義や効果が検討されている。本稿は、これらの研究に加えて、「野球ノート」を通じた「言語活動の充実」の可能性にアプローチする試みである。

2. 本稿の構成

本稿の構成は以下の通りである。3節では、本稿で使用する『野球ノートに書いた甲子園』の資料としての特徴を確認する。4節では、「野球ノート」に何を書くことが求められているのかを検討することで、指導者の「野球ノート」への期待を明らかにする。5節では、3節の内容をさらに詳細に検討するため、高校野球における指導者と生徒の関係を確認したうえで、当事者たちの考える「意義のあるノート」の特徴を明らかにする。6節では「野球ノート」の実践が、高校での部活動にとどまらず、「書く」ことをめぐる大学教育の現場からの要請でもあることを踏まえたうえで、「部活ノート」の教育方法としての可能性について議論する。最後に7節で知見をまとめ、今後の

課題を述べる。

3. 『野球ノートに書いた甲子園』の資料としての特徴

『野球ノートに書いた甲子園』（高校野球ドットコム編集部、全6巻）は、全国の高校球児が練習や試合の記録を綴った「野球ノート」について、高校野球ドットコム編集部が取材を行う形で編まれたシリーズである。全国の延べ32校の「野球ノート」が紹介されており、運動部活動を通じた「言語活動の充実」の可能性を探求する本稿にとって貴重な資料である。

『野球ノートに書いた甲子園』は、3年間の記録が収められたノートに基づく書籍だが、そこには編集者の意図が反映されている。そのため、本稿で扱うのは実際に生徒の書いた「野球ノート」ではなく、編集が加えられたものであることから、分析に際して工夫が必要になる。『野球ノートに書いた甲子園』は「野球ノートについて、これまでに高校野球ドットコムで連載してきたコラムに、そのチームや選手たちの“今”を再度取材して加筆」したものである（Vol.1, p.4）（本文中で『野球ノートに書いた甲子園』を引用する際には、巻号とページ数を記載する。第1巻～第5巻はVol.1～Vol.5, FinalはそのままFinalと表記する）。したがって、当事者に対するインタビューによってノートの内容が補足・再構成されているため、実際の野球ノートを用いた分析ではない。そのため、『野球ノートに書いた甲子園』を、実態としての「部活ノート」として扱うことはできない。そこで本稿が注目するのは、『野球ノートに書いた甲子園』において、どのようなノートに意義が見出されているのか、という点である。書籍として出版される限りにおいて、そこには“理想としての部活ノート”が規範として設定されていると考えられる。少なくとも、“理想としての部活ノート”であると一般的にコンセンサスを得られるだろうという蓋然性に基づいた編集がなされているはずである。特に、指導者へのインタ

ビューが加えられたことで、「野球ノート」を取り入れる意図や選手たちに何を望んでいるのかを知ることができる。言い換えれば、本稿が行うのは、「野球ノート」を綴るという行為に対して、指導者がどのような意義を見出しているのかを、『野球ノートに書いた甲子園』から読み解く作業である。したがって、本稿では『野球ノートに書いた甲子園』において指導者の「野球ノート」に対する価値判断を読み取ることのできる記述を分析の対象とする。

『野球ノートに書いた甲子園』のこうした特徴を踏まえ、本稿では『野球ノートに書いた甲子園』を運動部活動における「言語活動の充実」の可能性を探求するための素材として用いる。本稿を通じて行うのは、実際に生徒の書いた「部活ノート」を分析する際の視角を整えるための基礎的な分析である。

4. 「野球ノート」の分析

本節では、「野球ノート」に何が書かれているのかを検討することで、指導者がノートを通じて生徒に何を求めているのかを考察するための足場を作っておきたい。その際に、各高校で綴られている「野球ノート」を、形式と内容に分けて検討する。

4-1. 野球ノートの形式と項目

「野球ノート」は各チームが独自に取り入れているため、そこに、どのような形で、何を書くのかもチームによって異なる。ここではまず「野球ノート」に書くべき項目、すなわちノートの形式を確認する。『野球ノートに書いた甲子園』におけるノートの形式を分類すると、(1) 書くべき項目が生徒に委ねられているケース、(2) 書くべき項目が指定されているケース、(3) 両者の折衷であるケースの3つに分類することができる。

(1) 書くべき項目が生徒に委ねられているケース
作新学院高校は「合宿期間以外、提出は義務付

けられておらず、書き方も内容も選手に任されている」(Vol.5, p.12)。仙台育英高校の佐々木監督も「僕からこういうふうになきゃいけない、ということは一切言いません」(Vol.4, p.155)という。智辯和歌山高校(Final, p.20)や横浜隼人高校(Final, p.165)も書く項目が生徒に委ねられている。これらのチームでは、ノートに記載すべき項目が決まっていない。佐々木監督によれば「決められた項目を書いていくという方法もあると思いますが、それでは選手の個性がわからないんですね。自由に書かせることで、ノートに個性が浮き出てくると言うんですかね」(Vol.4, pp.154-155)というのが書くべき内容を指定しない理由とされている。

(2) 書く項目が指定されているケース

神奈川県立弥栄高校は毎日記入する8つの項目が決められている。「1. 自分の野球の夢」, 「2. 朝食で何を食べたのか」, 「3. 今日目標」, 「4. 今日一日で感じた、感謝の思い」, 「5. 今日スケジュール」, 「6. 今日の反省から改善する点を考え、明日の目標を設定する」, 「7. 一日を5段階評価する」, 「8. プラスの気持ちになる言葉」という8項目である(Vol.1, pp.74-77)。東海大付属甲府高校では9項目(Vol.4, p.119)、静岡高校でも8項目が設定されている(Vol.3, p.164)。これらの高校では、決められた項目に沿って、文章と数字の両方を活用しながら日々の記録を綴っている。

(3) 両者の折衷的なケース

履正社高校は、「(1) 体重、(2) 心拍数、(3) 睡眠時間、(4) 上半身の張りの具合、(5) 下半身の張りの具合、(6) 体調、(7) やる気」の7項目である(Vol.2, p.46)。7つの項目は書き始めの冒頭で5段階評価することになっている。しかし「そのあとの本文の内容は、書き方も、文字の量にもルールはない」(Vol.2, p.47)ことから、完全に自由な形式ではないが、全てが決まっているわけではなく、両者を折衷したケースである。

このように、各高校の「野球ノート」は書く内容が完全に生徒に委ねられているケースから、詳細に決まっているケース、そしてそれらを折衷したケースまで幅があることがわかる。

そして、次にあげる北海高校ではノートの形式が「文章を書く」と関連づけられている。野球ノートを通じた「言語活動の充実」の可能性を探る本稿にとって、形式と「書く」こととの関連は非常に重要な意味を持つ。

北海高校では「情報の蓄積」(Vol5, p.200)を目的として、個人ではなく部員が交代でノートを記入している。項目は「本日の練習メニュー(試合結果)」, や「練習における確認事項(即時記入)」, 「練習不参加者」等の6項目である(Vol.5, p.202)。そして、そのなかの「本日の反省・感想(誤字・脱字のないように, 丁寧に記入すること)」には、「25字×17列=425字」という指定がある(Vol.5, p.207)。平川監督は文字数を指定する意図を「書く練習という意味合いもあるからです」と説明する(Vol.5, p.206)。その背景には「[・・]我々の時代にはそんなに求められなかった「書く力」というのが求められるようになりました」(Vol.5, p.206)という社会の変化を感じ取ったうえでの理由がある。そのうえで「小論文を書くのもそうですが、自分が考えていること、起きたことをまとめること、感じたことをひとつの文章にすることというのは、野球とは直接つながりませんが、高校生としては大事なことなので、このノートにも取り入れています」と説明する(Vol.5, pp.206-207)。

北海高校は2016年の夏の甲子園準優勝校であり全国的にも有名な強豪校である。その北海高校で、野球に直接関係のない「書く」行為が重視されている。小論文を書くことを含めて、文章作成を高校生にとって重要なことだと認識しているのである。ここに「野球ノート」を通じた言語活動の具体的な実践例を見出すことができる。

4-2. 「野球ノート」に指導者が求める記述内容

北海高校の事例から「野球ノート」の重要性が示唆された。ただしそれは、「高校生としては大事なこと」という説明に止まっており、教育方法としての野球ノートの意義を、指導者がどのように捉えているのかは明確ではない。そこで、他の高校の事例を通じて指導者が「野球ノート」に寄せる期待を明らかにしよう。

「試合に勝ったという一言を書くのではなく、どうして勝ったのか。悪かったところ、良かったところ。そしてそのなかにどういう気持ちがあったのかを書いて欲しい。」(Vol.1, p.42, 都立小山台高校, 福嶋監督: 以下, 指導者名および選手名のみの場合『野球ノートに書いた甲子園』のインタビュー部分での発言を指し, それ以外の部分は適宜, 説明を加える)

「何ができて、何ができなかったか」を自己分析して、どんな練習をどんな意識でやれば良いかを考えながらやってみよう。」(Vol.2, p.114, 前橋育英高校, 荒井監督からの生徒のノートへのコメント)

「青柳監督が言う良いノートというのは、本人の自由な発想で、自分の気持ちを率直に書き綴った内容のノート。さらに、逆境の場面や試合で負けたあとに、どれだけその原因を分析できているかという内容のノートだ。」(Vol.3, p.74, 健大高崎高校, 地の文)

「ただ悔しいと書くだけではない。そこから自分は何をしたのか、したいのか。それを実行できる選手は内容も良く、パフォーマンスも良い。そういうノートが見たいですね」(Vol.5, p.44, 作新学院高校, 小針監督)

指導者たちが、練習や試合の場面における勝敗の原因やプレーの出来についての分析を求めている

ることがわかる。すなわち「試合に勝ったという一言を書くのではなく」勝因やプレーの良し悪しに関する記述、そして、「ただ悔しいと書くだけではない。そこから自分はなにをしたのか、したいのか」についての分析が重視されている。ここから、「野球ノート」の意義の一つは「分析的な思考を伴って書く」こと、すなわち「分析的な記述」にあると捉えられていることがわかる。次節ではさらに議論を進めて、生徒の分析的な記述をめぐる指導者のスタンスを考察する。

5. 「野球ノート」に対する指導者の期待

5-1. 指導者が生徒の「野球ノート」に求めること

『野球ノートに書いた甲子園』には、ある前提についての記述が見られる箇所がある。例えば、「名門校にはどうしてもついて回るイメージがある。「スパルタ」, 「伝統を重んじるあまりの苛烈な指導法」, 「監督の絶対的権威」(Vol.4, p.79), 「高校野球にありがちな上意下達組織」(Vol.5, p.131) とした記述である。『野球ノートに書いた甲子園』の本文ではこれらの記述は否定文になっており、上記の状況が当該チームに見られないことを示すために用いられている。しかし、そうした否定文が成立するためには、高校野球における指導者と生徒の関係が、前提として読者に理解されている必要がある。例えば、ある生徒がノートに疲労度を5段階で書く場合に「なかなか疲労度5です！とは言えないでしょうけど(笑)」(Vol.3, p.161) と語るように、指導者に対して「自分は疲れている」ことを正面から言えない関係や雰囲気がある。「野球ノート」の分析的な記述は、指導者と生徒のこうした関係を前提にしたうえで求められているといえる。以下では、上下関係を伴った指導者と生徒の間にある関係を「規律的な関係」と呼ぶこととする。議論を先取りすれば、指導者たちは規律的な関係性を理解したうえで、生徒たちにノートを書くことを求めている。

5-2. 意義のある野球ノートをめぐって

次の指導者の言葉には、ノートに書く内容への要求が表れている。指導者たちが「野球ノート」に何を期待しているのかを示した言葉であるため、最初に引用しよう。

「だいたいきれいごとをそつなく書いてすませようとするのが人間でしょう。でもそれじゃあ面白くない。意味がないんです。」(Vol.3, p.11, 佐賀北高校, 百崎監督)

「最初は本音を書けないこともわかっています。だけど、そういうきれいごとばかり書いている日誌であれば、いくら数ページにわたって書いていても、お前の日記は面白くない、読みたくない、つまらん、とはっきり書きます。」(Vol.3, p.11, 佐賀北高校, 百崎監督)

ここからは、「野球ノート」に対する指導者の3つのスタンスを読み取ることができる。第1に、指導者にとって「野球ノート」は、「きれいごとをそつなく書く」だけでは意義が見出されないということである。すなわちこれは、分析的な記述が要求されていることを意味している。第2に、意義あるノートを書くことができるようになるには時間を要するということである。「最初は本音を書けないこともわかって」おり、経験を積むことで意義ある「野球ノート」を書けるようになるという前提がある。第3に、「最初は本音を書けないこともわかっています」という言葉から、規律的な関係を前提として、生徒にとっては自分の考えをストレートに書くのはハードルの高いことだと指導者が認識していることである。

以上の3点を踏まえると、指導者は、生徒が自分で自分の殻を破り、つまり規律的な関係を避けるのではなく、自分の考えを分析的に書くようになるのを待つという姿勢を示していると考えられる。以下に示すように、意義のある野球ノートに対する指導者の認識は共通していると考えてよい

だろう。

「〔・・〕私が（コメントを：引用者）書きちゃうと、「監督に良いように思われたい」と思って選手が書きちゃうでしょ。そういうのも嫌なんです。〔・・〕自由な発想をして欲しいんです。」（Vol.3, p.72, 健大高崎高校, 青柳監督）

「「体裁を整えるために、キレイなことを書くんじゃないくて、ちゃんと喋れる高校生になって欲しかったんです。自分をちゃんと表現できる高校生になってくれと。」（Vol.3, p.102, 向上高校, 平田監督）

「うちの場合、何事も体で覚える、体で感じたことを落とし込むことが大事だと思っています。つまりグラウンドでやるが一番なんです。グラウンドでやるために、書くことが有効であれば書けばいい。でも言われて書くだけ、指導者に見せるためならば、やらなくていい」（Vol.5, p.24, 作新学院高校, 小針監督）

生徒たちは「監督に良いように思われたい」という気持ちから、ノートの内容を「体裁を整えるために、キレイなことを書く」ことが多い。しかし、「言われて書くだけ、指導者に見せるため」のノートであれば「やらなくていい」というのが、指導者たちの認識である。先述のように、指導者と生徒の間には規律的な関係がある。「自由な発想をして欲しい」、「ちゃんと喋れる高校生になって欲しかったんです。自分をちゃんと表現できる高校生になってくれ」という言葉からは、規律的な関係を自覚したうえで、それでも生徒が自分の考えを綴ることへの期待が現れているのである。この点に、教科教育ではなく運動部活動において言語活動を取り入れることの独自性が見出される。もちろん、教科教育のなかでも分析的な記述は求められているが、指導者と生徒との間の規律的な関係性を介して行われる分析的な記述とコ

ミュニケーションが運動部活動で言語活動を実践する際の特徴である。

6. 考察—書くことをめぐる大学教育からの要請と「野球ノート」の可能性

ここまで検討してきたように、指導者は生徒に対して、規律的な関係性を背景としながらも、ノートに分析的な記述を求めている。そうした実践は、もちろん高校での野球の上達という目的もあると思われるが、「野球ノート」を通じて身につけることが求められている分析的な記述は、大学教育の現場からの要請でもある。本節では、分析を伴った「野球ノート」の実践と、現代の大学教育の課題をリンクさせる形で考察したい。

たなかほか（2015）は、「「学び」を成立させるもの」という視点から大学教育における課題点を指摘している。大学教育の課題の一つに、学生の文章作成の問題がある。そして、文章作成の授業で学生の書いた文章が「どこかで「模範解答」を聞いたことがあるような話題であれば、自分の思考とは関係なく文章が書いてしまう」と問題提起する。一方で、学生に対して「自分がよく知っていることを書くよう指示すると、途端に何もアイデアが生み出せなくなることがある」（たなかほか、2015）という。「質問や課題が「与えられた」ときに、自ら思考を言葉にして答えるのではなく、その質問や課題を与えた教員等が、ひとまず納得するような「無難な答え」を選んで「回答」しているだけのようにも見える」（たなかほか、2015）という状況が、大学教育の現場から報告されている。

教員が納得しそうな、「模範解答」のような「無難な答え」が「回答」される状況は、指導者たちが「野球ノート」で回避しようとしている状況と酷似している。聞いたこと、知っていることをそのまま書くことは、本稿が分析的な記述と呼んできた「野球ノート」の対極に位置づけられるとあってよい。

また、従来から「中学・高校時代に意見文や説

明文の書き方を学ぶ機会は総じて少なかった」ことが示唆されており（渡辺，2017，p.14），「言語活動とは，教室においては，まずもって集団で行う議論や話し合いのことではないかとも思える」（渡辺，2017，p.60）ほどに，「書く」ことが“おいてけぼり”になってしまっている」という状況がある（渡辺，2017，p.66）。さらに渡辺によれば，2013年の現行学習指導要領全面実施によって，「言語活動の充実」による中学・高校での「書く」学習の機会が増加（あるいは減少）したという事実は認められない」という（渡辺，2017，p.65）。すなわち，学習指導要領で「言語活動の充実」が謳われたとしても，それだけでは「書く」学習の機会に変化は見られないというのである。

これらの指摘を踏まえると，「野球ノート」で分析的な記述をするという経験の有無が大学入学後の教育に活かされる可能性は高いと考えられる。もちろん，「野球ノート」は大学でのレポートや論文とは異なり，文章の「書き方」を学ぶことが目的ではない。だが，何らかの命題を論証するための基礎的なトレーニングとして，部活動の試合での勝敗，プレーの良し悪し，身体的・精神的な状態等を分析的に記述する経験の有無は，大学での学びへの一つの接続（articulation）を具体化する可能性がある。つまり，「野球ノート」が「分析的に書く」という行為を通じた「言語活動の充実」に資する可能性が示唆されるのである。こうした文脈において，「野球ノート」が分析的に記述されることの方法としての可能性を見出すことができる。

7. 知見のまとめと今後の課題

本稿では「部活ノート」を教育方法の一つと捉え，運動部活動における「言語活動の充実」の可能性を探ってきた。本稿の知見は以下の通りである。まず，4節では，「野球ノート」は各高校によって様々な形式がとられていること（4-1），そして，指導者たちは「野球ノート」に対して，事実のみを書くのではなく，勝敗やプレー，自身の

状態について分析的な記述を求めていることがわかった（4-2）。5節では，高校野球部の指導者と生徒の間には規律的な関係があり，その規律的な関係を理解したうえで，それでも生徒が自分の意見をノートに書くことを期待していた。最後に6節では，「野球ノート」を通じて身につけた分析的な記述は高校野球だけで完結するものではなく，むしろ大学教育の現場からの要請でもあることを明らかにした。そして，これらの取り組みに高校と大学における学びの接続の可能性が見出されることが示唆された。

ところで，本稿での検討は『野球ノートに書いた甲子園』における指導者へのインタビュー部分が中心であった。そのため，生徒が記入した内容や指導者からのノートへのコメントは分析の対象となっていない。これは3節で述べたように『野球ノートに書いた甲子園』が編集された書籍であることに起因している。部活ノートの教育方法としての可能性をさらに探求するためには，書籍の分析を超えて，実際の部活ノートをつぶさに観察する必要がある。その際に，本稿が示してきた「分析的な記述」という視点が，部活ノートを読み解くための視角になると考えられる。

注

- (1) 全国高等学校体育連盟および日本高等学校野球連盟のホームページから2018年度の各連盟の登録者数を算出した。

引用文献

- 阿部昇（2016）「言語活動の充実」から「アクティブラーニング」への流れをどうみるか．日本教育方法学会編，教育方法45 アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討，図書文化社：東京，pp.38-51.
- 中央教育審議会（2008）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/

- afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf (2019年1月24日取得).
- 栗山靖弘 (2018) スポーツ推薦入試とキャリア形成 - 「言語活動の充実」に注目して. 体育の科学, 第68巻12月号, 889-893.
- 高校野球ドットコム編集部編 (2013) 野球ノートに書いた甲子園. KK ベストセラーズ: 東京.
- (2014) 野球ノートに書いた甲子園 2. KK ベストセラーズ: 東京.
- (2015) 野球ノートに書いた甲子園 3. 一流した汗はグラウンドだけではない. KK ベストセラーズ: 東京.
- (2016) 野球ノートに書いた甲子園 4. KK ベストセラーズ: 東京.
- (2017) 野球ノートに書いた甲子園 5. KK ベストセラーズ: 東京.
- (2018) 野球ノートに書いた甲子園 FINAL. 幻冬社: 東京.
- 文部科学省 (2013) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf (2019年1月24日取得).
- (2014) 言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm (2019年1月24日取得).
- (2017) 高等学校学習指導要領. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf (2019年1月24日取得).
- 日本高等学校体育連盟ホームページ. http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/index_koushiki.html (2018年10月2日取得).
- 渋谷崇行・西田保・佐々木万丈・北村勝朗・磯貝浩久 (2018) 高校運動部活動における心理社会的スキルの日常生活への般化: 3時点での交差遅れ効果モデルによる検討. 体育学研究63 (2): 563-581.
- たなかよしこ・野崎浩成・小山義徳・河住有希子 (2015) 「学び」を成立させるものは何か - 学習者中心から主体的学びを考える. 日本教育心理学会第57回大会発表論文集, 62-63.
- 上野耕平 (2014) ライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響. スポーツ教育学研究34 (1): 13-22.
- 渡辺哲司 (2017) 高校におけるライティング学習の経験はどれほどあるか. 渡辺哲司・島田康行著, ライティングの高大接続 - 高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ. ひつじ書房: 東京, pp.9-18.
- 渡辺哲司 (2017) 「言語活動の充実」によって高校までの「書く」学習の機会は増える(た)か. 渡辺哲司・島田康行著, ライティングの高大接続 - 高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ. ひつじ書房: 東京, pp.59-67.
- 全国高等学校体育連盟ホームページ http://www.zen-koutairen.com/f_regist.html (2018年10月2日取得).